

Vol.03

TALK SESSION

メディコスと描く
まちの未来地図

2023年度で開館8年目を迎えるメディコス。岐阜市の歴史・ひと・文化の情報や魅力を集積、発信する「ぎふ古今」を開設するなど、文化拠点としての役割を深めてきました。地域の過去や現在を踏まえ、未来をどう描くのか？総合プロデューサーの吉成信夫が地域のキーパーソンとまちの未来を語ります。

歴史ある“伊奈波らしさ”を未来につなぐ、まちづくり。

吉成 山本さんは「山本佐太郎商店」がご実家ですね。

山本 そうです。大学の4年間以外はずっとここです。僕のおじいさんが週5で通っていた喫茶店「壺(いち)番地」、洋菓子の「イチダ洋菓子店」、栗粉餅で有名だった「ねこもちや」、カツ丼と中華そばの「丸信」…。今はみんな閉店してしまいましたが、そんな思い出の店があった伊奈波の参道が、僕の原風景ですね。僕は小学生の頃から父の仕事を手伝って油の配達トラックと一緒に乗っていたんですが、当時は柳ヶ瀬の配達に半日かかったのに、今は5分。飲食店や居酒屋が玉宮や駅前に移って、飲食の中心地が変わったと実感します。そうやって、まちの重心は変わっていくんだと。

吉成 なるほど、たしかにまちは変わっていきますよね。松枝さんは岐阜善光寺①の前住職である松枝秀晃(しゅうこう)さんと結婚されて、岐阜市にいられたんですね。

松枝 はい、実家は下呂市で旅館を営んでいて、2005年に嫁いできたときに、この辺りを歩いていて水琴亭や石原美術、日下部邸といった素晴らしい建物が残っていることに、本当に感動したんです！でも、日下部邸もたくさんの町家も、いつの間にか、あれよあれよと壊されてなくなってしまい…。もったいないし、本当にいいのかなと思っていました。

「岐阜まち家守(やもり)」を設立

山本 僕も自分が生まれ、育ち、商売をしてきたこの地域を「なんとかしなくてはいけない」という想いがあって、2021年にまちづくり会社「岐阜まち家守」②を立ち上げました。

吉成 山本さんと松枝さんとNPO法人ORGANの蒲勇介さんの3人が組んだというのが、面白いよね。

山本 僕は「薄皮たい焼き 福丸」さんや馬喰(ばくちう)一代の「飛騨牛 グリルばくろ」さんなど、飲食店のコーディネートにも関わってきましたし、大きな“母性”をもってこのまちに関わっている朋子さんや、長良川おんぼく(長良川温泉泊覧会)を開催してきた蒲さん、不動産の有資格者など、まちづくりをしてきた人が出資者になって、この地域の町家や空き家を活かすためのエリアマネジメントを行う不動産会社として、株式会社岐阜まち家守をスタートしたんです。

吉成 「裏参道モール」③も岐阜まち家守のプロジェクトの一つですね。

山本 そうです。僕は代々この場所で商いをしていることもあり、ここにいるんな個店が商売できる未来をつないでいけたらと思っています。裏参道モールには、2022年に岐阜善光寺の御開帳に合わせて開催したマルシェ「ミライの参道まるけ」の初回に出店したことがきっかけで、天むすのお店「天ころりん」さんが入居することが決まり、連鎖的に長良川が経営するフォーの店「pho gnu(フォーヌ)」さんの出店も決まって、勢いよくスタートが切れました。

吉成 「ミライの参道まるけ」は“伊奈波らしさ”があって、すごくいいですね。何度か行ったけれど、参道の未来が見えるような気がしました。そもそものは毎月15日に善光寺で開いている「善光寺大門まるけ」が発端なんですよ。

松枝 はい。「お寺を若い人が集う場所にしたい」と口癖のように言っていた主人が、2014年に始めたのが「善光寺大門まるけ」です。当初は出店者も少なく、15日が平日のことも多くて静かな感じでしたが、出店者同士の仲が良くて、毎月

お寺に遊びに来る同窓会みたいな感じで、最初からすごく雰囲気よかったんですね。みなさん、この場所はどこか“守ってもらってる”感覚があるっておっしゃってください。

吉成 僕も最初に岐阜市に引っ越してきたときに、この境界のお寺の隣に住むことに決めたんです。言葉にうまくできませんけれど、空気が少し違って、守られているような、そういう場所だと思う。「福丸」さんや「お惣菜 あおば」さんも長屋的な、大きな家族みたいな温かさがあっていいよね。

境界がゆるやかになくなり、
メディコスとまちがつながる

吉成 夏には開館8周年記念イベントとして、メディコスと「善光寺大門まるけ」がコラボした「メディコス夏まるけ」も開催していただいて、ありがとうございました。

松枝 2日間、お天気も良くとても楽しかったです。

吉成 伊奈波エリアでは、まちかどに本棚を置いてみんなで共有する小さな図書館「ぎふまちライブラリー」も展開していて、山本佐太郎商店さんも善光寺さんも本棚を置いてくれていますね。まちと図書館、メディコスの境界がずっとなくなって、本を通して人と人、まちがつながってきた。

山本 メディコスからの導線が繋がって、伊奈波や川原町、長良、柳ヶ瀬と周遊性が高められるといいですよ。これからは、地域だけでなく観光の目線も取り込まなくてはと思っています。といっても、それは土地や生活の中にあるもの。僕もどこかに出かけたら、その土地の人が食べているものを食べたい。たとえば、それが伊奈波なら「冷やしたぬき天国」の冷やしたぬきであり、「福丸」のたい焼きであり、「天ころりん」の天むすということ。“暮らすように旅をする”ということが、これからの観光のキーワードになると思います。

松枝 「ミライの参道まるけ」の来場者アンケートで、伊奈波について「歴史や文化がある」「このままの雰囲気でいてほしい」という意見のほかに「初詣にしか来ない」という意見があって。もっと日常としてここに来てもらえるように、いかに仕掛けをしていくかが大切だと思います。

吉成 メディコスは「図書館×公園」を謳っているけれど、伊奈波には「ぎふまちライブラリー」に参加しているお店やお寺のように、生活に近い文化的な場がある。今後、そんなまちの中継点とメディコスをつなぐ地図を作りたいですね。

TALK
SESSION
PLACE

山本佐太郎商店

岐阜市松屋町17 9:30~17:30
日曜・祝日定休 TEL.058-262-0432
<https://www.m-karintou.com/>

TALK MEMBER

総合プロデューサー
吉成 信夫山本佐太郎商店 4代目
山本 慎一郎さん岐阜善光寺
松枝 朋子さん

KEY PERSON PROFILE

山本慎一郎さんは明治9(1876)年から続く老舗油問屋「山本佐太郎商店」の4代目。2012年から始めた“大地のおやつ”シリーズを全国に展開。松枝朋子さんは2005年に岐阜善光寺副住職だった松枝秀晃さんと結婚。2018年に急逝した夫の意思を継ぎ、今も前門市「善光寺大門まるけ」の事務局を務める。

COMMENTARY

1 岐阜善光寺

戦国時代に織田信長が信州善光寺の御本尊「一光三尊阿弥陀如来」を岐阜に招いて祀ったことが寺のはじまりとされ、御本尊が信州善光寺へと遷座した後は、御分身の「善光寺如来」が祀られている。明治24(1891)年の濃尾震災で寺が全焼したが、大正元(1912)年に再建された。1月の初詣、2月の節分祭、7月の胡瓜(きゅうり)封じには特に多くの参拝者が訪れる。



2 岐阜まち家守

岐阜城の城下町として栄えた「岐阜町」(現在の金華・京町地区)の素晴らしい景観を守るために、2021年に地元有志らが設立したまちづくり会社、町家や空き家の所有者と、建物を起業のために活用したい人や移住者をマッチング。「岐阜麦酒醸造」のクラフトビール醸造所とタッブルームを誘致するなど、地域のにぎわい創出や歴史ある町並みの保存に努めている。



3 裏参道モール

「岐阜まち家守」によるプロジェクトの一つで、伊奈波神社・岐阜善光寺の参道の1本南にある“裏参道”に建つ複数の古民家をリノベーションして誕生した商業施設。2023年1月に天むすとお惣菜の店「天ころりん」、3月に米粉麺フォーの専門店「pho gnu」がオープンし、伊奈波エリアの新たなグルメスポットとして人気を集めている。

「天ころりん」
岐阜市白木町19 TEL.080-7657-3697
「pho gnu」
岐阜市白木町20 TEL.070-1640-1588gifu
まち歩き
MAP地図を片手に
岐阜のまちの
文化を巡ろう

戦国時代に造られた岐阜城の城下町「岐阜町」は、江戸時代以降も米屋や材木屋などの商店が軒を連ねる商工業の町として発展。伊奈波神社や岐阜善光寺の境界は、歌舞伎や見世物、茶屋などで賑わう繁華街として栄えました。近年、伊奈波エリアは、そうしたかつての参道の賑わいを取り戻そうとマルシェが開催されたり、歴史ある町並みに馴染む古い建物を改装した店がオープンしたりと、活気づいています。

キーパーソンに聞いた

エリアの定番

私たちの定番はここ！



A 山本佐太郎商店

創業140年余の油問屋。“30年後も愛されるおやつ作り”をコンセプトとした「大地のおやつ」シリーズも人気。2023年6月にリニューアルした店舗の2階ではイベントも多数開催している。

岐阜市松屋町17
9:30~17:30 日曜・祝日定休
TEL.058-262-0432 <https://www.m-karintou.com/>

時々、和菓子職人の“まっちゃん”さんが1階の「あんたきば」で作るお菓子が食べられるのも、本当に贅沢なことだと思っています。(松枝)

B 松花堂

大正5(1916)年から続く老舗の和菓子屋。素材にこだわり、創業以来変わらない伝統的な技法を用いて作られる美しい季節の生菓子は、茶会のお茶菓子の定番として親しまれている。

岐阜市松屋町15
9:00~17:00 日曜定休
TEL.058-262-5741 @ @shokado_wagashi

岐阜の茶菓子といえば、必ず名前が上がる名店です。店の佇まいも良く、お菓子をを通して季節の移ろいを感じることができます。(山本)

C お惣菜 あおば

2020年春に、岐阜善光寺専用駐車場の敷地内にオープンした手作りのお惣菜や日替わり弁当などを販売するテイクアウト専門店。小さな“まちの台所”として地域に愛されている。

岐阜市伊奈波通1-8
11:00~17:00 木曜定休
TEL.070-3179-7477

いつでも美味しいお惣菜が揃っていて、その場でおにぎりを握ってもらったり、オードブルもお願いできたりして、とても助かります。(松枝)



写真で巡る昔と今

メディコス内の「ぎふ古今」にある端末では、古い地図や写真を通して、岐阜のまちの歴史を辿ることができます。伊奈波エリアの「古今」の景色を比べてみましょう！



濃尾震災直後の伊奈波神社



瀬古写真館提供

伊奈波神社は、金華山に隣接する丸山に祀られていた神社を天文8(1639)年に斎藤道三が周辺の神社と併せて現在地に遷座したといわれる。明治24(1891)年の濃尾震災で社殿が焼失し、明治30(1897)年に再建された。



現在の伊奈波神社



境内には社大なる楼門、拝殿、本殿などが建つ。4月に行われる「岐阜まつり」の頃には境内や参道の数百年の桜が見ごろとなり、大勢の行客で賑わう。また、市内で最も多い参拝客が訪れる初詣スポットとしても有名。



昭和40年頃(歴史)の伊奈波通り



岐阜善光寺提供

戦国時代に城下町として栄えた伊奈波神社や岐阜善光寺境界は、かつて歌舞伎や見世物、茶屋などで賑わう繁華街であったとされる。参道である伊奈波通りには、昭和期に入っても数多くの商店が立ち並んでいた。



現在の伊奈波通り(マルシェ開催時)



photo by shimon

伊奈波神社、岐阜善光寺の参道周辺では、近年、空き家や古い建物を改装した店が次々にオープン。そうした動きを駆け、賑わいを取り戻すために、大規模なマルシェ「ミライの参道まるけ」も定期的に開催されている。